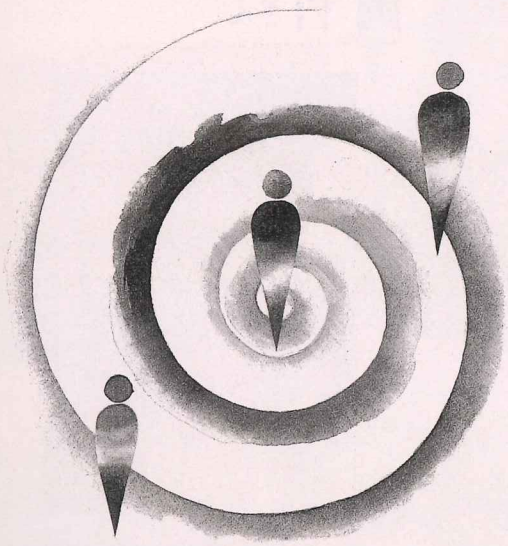
誌上
ケース検討会
57

40代・専業主婦の統合失調症の利用者をどう支えていくか



全国各地で行われている事例検討会の模様を誌上で再現します。（検討会及び事例の内容は、プライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました）

●事例提出者

Dさん（精神障害者地域生活支援センター・保健師）

●クライアント

Sさん・42歳・女性

病名：統合失調症

●家族構成

夫（47歳）、長男（16歳）、義母（82歳）

●住居

持ち家（一戸建て）

●親族

両親は隣町に居住。きょうだいはいない。

●生活歴

隣町（両親が住んでいる家）で生まれ育つ。小・中学校の頃は成績が悪く、ずっといじめられてきた。23歳の時に見合いをし、結婚（本人曰く、「持参金を持たされて結婚させられた」）。出産後間もなく統合失調症を発症し、入院。そのため、長男の幼い頃の子育ては実質的に義母が行った。

●ふだんの生活状況

・毎朝4時頃に起床し、夫と長男の弁当を2時間くらいかけてつくる。
・2人を送り出した後は家事をするが、途中で居眠りをしてしまう。
・家の前に小さな畑があり、義母が耕していたが、体調を崩したため、近所の人に教えてもらいながらSさんが畑仕事をしている。
・義母は訪問介護を週1回、訪問看護を月2回利用している。

●紹介経路

2年前に役場の保健師から紹介を受けた（心配ごとや不安なことがあると、頻繁に知り合いに電話をかけるため、住民から苦情が出ていた）。

●問題点

・本人が障害者手帳、障害年金を拒否している。
・ホームヘルパーの導入ができない。
・今後、どう支えていけばよいのか方策を考えあぐねている。

ケース検討会

野中　ありがとうございました。42歳の統合失調症の女性が置かれている状況をコンパクトに説明していただきました。これから、Sさんをどう支えていけばよいのかを考えていきますが、そのためには、今のDさんの説明に加えてどんな情報が必要でしょうか。まずは、自分の価値観を交えずに、客観的な事実・情報をDさんから引き出してください。情報がある程度そろったところで、具体的な手立てを考えていきたいと思います。

ケースの全体像をつかむ（見立て編）

家族・近隣との関係について

野中　では、質問をどうぞ。

発言　長男の子育てはお姑さんがしてきたということですが、現在、Sさんと長男はどのような関係なのでしょうか。

Dさん　どちらかというと、長男はお父さんと話すことが多く、お母さんとの会話は少ないようです。ただ、優しいところのある子で、自分の買い物のついでにお母さんが好きなCDを買ってきてあげたりしています。

発言　ご近所との関係はいかがですか？

Dさん　これまでもたびたび電話を頻繁にかけることがあったようなので、迷惑がられているところがあります。正直、それほど良好な関係ではありません。今、親しくしているのは、Sさんが畑仕事を教えてもらっている近所のおばちゃんくらいだと思います。本人もご主人も、精神障害者だということを周囲には知られたくないと強く思っているので、自分たちから近所の方に話しかけたりすることもないようです。

野中　電話をかけた相手は誰ですか？

Dさん　長男のことで心配ごとが出てきた時は、長男の同級生のお宅とか――。

野中　相手の傾向のようなものはありますか？

Dさん　そこまでは、ちょっとわかりません。

野中　保健師につながったのはどういう経緯だったのですか？

Dさん　「ここに電話をしたら怒られた」と本人から保健師さんに連絡があったそうです。

野中　保健師とは知り合いだったのですか？

発言　あの、私がその保健師なのですが――。

野中　それはちょうどよかった。事情を教えていただけますか？

保健師　はい。もともと長男の育児相談の時から面識があって、その頃からちょっと問題を抱えていらっしゃる方かなという印象がありました。そんなこともあって、これまでも心配ごとがおきた時などは、電話をかけてこられたり、役場までいらっしゃったりしていました。そういう経緯があったので、その時も私のところに電話をしてきたのだと思います。

野中　よくわかりました。ありがとうございました。他に質問はいかがですか？

発言　実家のご両親とは、どんな関係ですか？

Dさん　隣町といっても自転車で行ける距離ですので、時々は夕飯のおかずをもらいに行ったりしているようですが、それほど頻繁に交流があるわけではありません。

発言　「持参金を持たされて結婚させられた」とご本人は言っているようですが、ご両親は本人に冷たいわけではないのですか？

Dさん　Sさんとお話をしている時にたまたま話題がご両親のことになると、“その話はしたくない”という雰囲気を強く出されるので、突っ込んで聞いたことはないのですが、長男の運動会などにはお弁当をつくってきてくれたりするようなので、特別関係が悪いわけではないと思います。

身体状況・社会交流について

発言　ご本人は服薬はされていますか？

Dさん　はい。

発言　薬の中身はわかりますか？

Dさん　いえ、把握していません。

野中　薬は必ず聞いたほうがいいです。新薬なのか旧薬なのか押さえておく必要があります。

Dさん　はい、わかりました。

発言　外出時の移動手段は何ですか？

Dさん　ご本人は運転免許をもっていないので、もっぱら自転車です。クリニックに行く時は、バスか夫がクルマで送り迎えしています。

野中　クルマの車種は何ですか？

Dさん　はっきりとはわかりませんが、5ナンバーの乗用車です。

野中　夫の仕事は何ですか？

Dさん　建築関係の現場で働いています。

野中　経済状況はいかがですか？

Dさん　決して裕福ではありません。どちらかというと厳しいほうだと思います。

発言　仲のよい友人などはいないのですか？

Dさん　「友達はいない」とおっしゃいます。

野中　今年の年賀ハガキは何枚来たかわかりますか？

Dさん　うちのセンターからの1枚だけです。

野中　年賀状の枚数を答えられたのは、あなたが初めてですよ。しっかり把握していますね。

Dさん　ありがとうございます。

発言　最終学歴はわかりますか？

Dさん　高校卒業です。

野中　クラブ活動は何をしていましたか？

Dさん　そこまでは聞いていません。

野中　その時のつながりが残っている可能性もありますから、情報収集してみてもいいかもしれませんね。

Dさん　はい、わかりました。

発言　外で仕事をしたことはあるのですか？

Dさん　ないと聞いています。

発言　ふだん、夫とはどんな話をしているのでしょうか。

Dさん　子どもの話がほとんどのようです。心配なことがあると職場に電話をしてしまうので、夫からは怒られているようです。

発言　心配ごとというのは？

Dさん　授業参観のこととか、受験の説明会があると聞いたけどどうしたらいいか、といったようなことです。

病気の状況について

発言　発症の経緯はわかりますか？

Dさん　私が聞いているのは初発の時のことかどうかわからないのですが、お姑さんによると、結婚して間もない頃に、突然「死ぬ！」と言って道路に飛び出したことがあったそうです。

野中　なるほど。どうも緊張病型のようですね。こういう方は、よい時と悪い時の違いが明確で、徐々に発症していくタイプではありません。予後も比較的いいんです。ですから、お弁当作りなどもできているんですね。薬をきちんと飲んでいる限り、あまり心配する必要はないでしょう。ただ、認知行動障害がありますから、心配事があるとそれを長く保持できないのです。すぐに処理できないと安心できない。だから、ほうぼうに電話をしてしまうんですね。

発言　ご主人はSさんの病気について、どの程度理解しているのでしょう。

Dさん　ご主人の口から出るのは、「とにかく周りには絶対知られたくない」ということだけです。ただ、ご主人はクリニックにも行っていますので、ドクターからの説明は受けています。

野中　一応、医者から説明は受けている。家族心理教育は受けていますか？

Dさん　そういう話は聞いていません。

野中　そこが一つのカギでしょうね。「ドーパミンって知ってる？」と夫に聞いて、知らなかったら家族心理教育を受けていないということです。道路に飛び出したりするのはドーパミンのせいだとわかれば、別に隠し立てする必要はないんですけどね。それを家系に問題があると思ったりすると、隠さないといけないような気になってしまう。ドーパミンを知らないというのは、糖尿病の人がインシュリンを知らないようなものですからね。

Dさん　今度、そのあたりを確かめてみます。

発言　通院は定期的にされているのですか？

Dさん　ご本人の通院は不定期です。ご主人が連れて行ってくれない時やご本人の調子が悪い時は、ご主人が薬を取りに行っています。

野中　ご主人が連れて行ってくれない時というのは、どういう時ですか？

Dさん　ご主人は、お姑さんを一人で家に置いておくことに強い抵抗がある方なので、仕事の都合がつけば、自分で薬を取りに行きます。ご本人には、2カ月に一度くらい、そろそろ行ったほうがいいかなと思った時にクルマで連れて行くか、「バスで行ってきなさい」と言っている

ようです。

野中　なるほど。夫が受診コントロールをしているわけですね。珍しいケースですね。ずっと同じドクターにかかっているのですか？

Dさん　そうです。50代後半のドクターです。

発言　ご本人は、自分の病気をどういうふうに受け止めているのでしょうか。

Dさん　ご本人の口から出る言葉は「私は心の病気です」。その程度の理解です。

野中　彼女が飲んでいる薬は、心ではなく脳に効くものなんですけどね――。精神疾患というのは脳の病気ですから、一種の身体障害であって、ご本人もそう理解したほうがきっと楽になれるでしょう。おそらく、誰もそういう説明をしてこなかったのでしょうね。

Dさん　そうだと思います……。

発言　周囲に電話を頻繁にかけるようになるのは、どれくらいの頻度で起こるのですか。

Dさん　はっきりとした周期があるわけではなくて、何か一つ心配ごとがあると、解決するまでほうぼうに電話をかけるという感じです。ただ、今は電話をかける先を保健師さんと私たちのセンターのところに絞りましたので、トラブルは減ってきました。

Sさんの人となりについて

発言　Sさんの趣味はなんですか？

Dさん　チャゲ&飛鳥のCDを聴くことです。

野中　チャゲ&飛鳥の何の曲が好きなのかな？

Dさん　聞いたことはあるのですが……。

野中　何が好きか、何を大切に思っているかというところに、その人の人生の価値観があらわれます。チャゲ&飛鳥のどんな曲が好きかわかれば、Sさんの人生観がもう少し見えてくるかもしれません。

Dさん　たしかに――。支援センターにSさんが遊びに来られた時に、たまたまチャゲ&飛鳥のCDがあったので貸してあげたのですが、もう少し突っ込んで話してもよかったですね。

野中　まあ、これからもチャンスはたくさんあるでしょう。ところで、支援センターに遊びに来たというのは？

Dさん　実は、1年くらい前までは、クリニックに行った帰りに支援センターに寄ってくださっていたのですが、そうすると家に帰るのが夕方5時くらいになってしまって、お姑さんに怒られるということで、来れなくなってしまったんです。でも、その後、彼女の居場所を提供するという目的もあって、彼女の町に私たちが出向いて「憩いの場」をもつことにしました。

野中　それは、どういう建物で、どんなことをしているのですか？

Dさん　建物は町の施設です。月に2回ほど行っていて、プログラムは特に決めていません。

来た方に自分がやりたいことをしていただきます。書道をすることもあれば、食事会をすることもあるし、外に出かけることもあります。参加者は、障害をもっている方であれば誰でも参加できます。Sさん1人の時もありますし、6～7人集まることもあります。Sさんは書道には自信があるようで、半紙を自分でそろえてこられたりしました。

野中　何て書くのかな。そういうところにも、その人の人生があらわれますからね。

Dさん　う～ん、ちょっと忘れました。

野中　今度機会があったら、自由に書いてもらうといいですよ。

Dさん　はい、そうします。

発言　Sさんは毎回参加しているのですか？

Dさん　息子さんが高校に入るまでは皆勤賞だったのですが、高校入学後はクラブ活動をしているせいか朝早く登校して、夜も10時頃に帰ってくるらしいのです。Sさんも大変になって、憩いの場も休まれることが多くなりました。

Sさんの能力について

発言　お姑さんの要介護度はいくつですか？

Dさん　要介護2です。内科系には特別な疾患はないようですが、緑内障が進んでいて、視力が非常に落ちている状態です。

発言　Sさん自身はどれくらい介護をしているのですか？

Dさん　食事のセッティングとポータブルトイレの掃除くらいです。

野中　食事介助は？

Dさん　食卓に並べれば、ご自分で食べれます。トイレも自分でできます。

野中　そういうADLの状態なら、数時間一人で家にいても大丈夫なんじゃないですか？

Dさん　私もそう思うのですが……。

野中　お姑さんの状態が不安定になったりすることはあるのですか？

Dさん　私がかかわるようになってからの2年くらいは、ほぼ安定した状態です。

野中　食事は誰がつくっているのですか？

Dさん　Sさんです。

野中　得意の料理はなんですか？

Dさん　カレーです。

野中　どんなカレーなんだろうね。

Dさん　甘いカレーです。

野中　食べたの？

Dさん　はい。

野中　クライアントのつくったカレーまで食べてるケアマネさんは、そうはいませんよ（笑）。どうやって食べたのですか？

Dさん　訪問した時に、「昨日の夜つくったから、ちょっと味見をしてほしい」と言われて。

野中　どういう意味だったと思いますか？

Dさん　自分はこんなことができるのよ、というアピールだと思います。

野中　そう、認めてほしいという気持ちですよね。それで、味は？

Dさん　おいしかったです。

野中　褒めてあげた？

Dさん　はい。

野中　そういう時は、本気になって露骨なまでに褒めることが大事ですね。「こんなカレー、見たことも聞いたこともない！」というくらいに（笑）。相手が認知行動障害をもっていたら、なおさらです。

Dさん　はい。

野中　食事はレベルが高いということですね。お弁当にも興味がわきますね。2時間かけてどんなお弁当をつくっているんでしょうね。

Dさん　見ました。

野中　見たの？　あなたエライね（笑）。どんなお弁当だった？

Dさん　隅から隅までしっかりつくっていました。朝から煮物をつくって、卵を焼いて、ウインナーにもちゃんと切れ目を入れて（笑）。

野中　それを見て、何て言ったの？

Dさん　「もっと手抜きしなさいよ」と（笑）。

野中　そうしたら？

Dさん　「あなたはどういうお弁当をつくるの？」と聞かれました。

野中　それで？

Dさん　「冷凍食品オンパレードよ」（笑）。

野中　なるほど。彼女は冷凍食品を知っているのかな。例を見せてあげるといいんだけどね。

Dさん　一緒に買い物に行きました。

野中　あなた、ホントにエライね（笑）。それで、その後はどうなりました？

Dさん　一品か二品は冷凍食品が入るようになりました。

野中　それで、起床時間は？

Dさん　相変わらずです。

野中　やっぱり4時か――。でも、だんだんSさん像が見えてきましたね。洗濯もSさんがしているのかな？

Dさん　そうです。夜に洗濯機を回して、朝干しています。

野中　洗濯物はピンと張って干していますか？

Dさん　はい、ちゃんと干しています。

野中　本当にレベルが高い方ですね。お化粧はどうですか？

Dさん　出かける時にはしています。

野中　乱れてはいない？

Dさん　病院に入院されている患者さんのようには乱れてはいないです。

野中　でも、見る人が見れば統合失調症だということがわかる？

Dさん　はい、わかります。

野中　なるほど、そこには認知行動障害が若干見られるわけですね。

さて、ここまでのやりとりで、だいたいSさん像が見えてきましたね。ひとつ気になるのは、なぜ2年前にSさんがほうぼうへ電話をするようになったのかということです。この時期、Sさんが不安になるような出来事は起きませんでしたか？

保健師　そういえば、お姑さんの状態が悪くなり始めたのがその時期です。

野中　Sさんは自分で物事を判断して行動することができる方ですか？

Dさん　指示があればその通りの動きはできますが、新しい事態に遭遇すると、うまく判断できずに不安な気持ちになる方です。

野中　家事などもお姑さんの指示でやっていたのではないですか？

Dさん　たしかに――。そう考えれば、いろいろなことが符合しますね。

野中　おそらく、Sさんを何かと助けていたお姑さんのほうが助けが必要な状態になってしまったために、不安が一気に高まったのでしょうね。ここまで見えてくれば、今後どういう手立てをとればよいかも考えやすいでしょう。

具体的な対応策を考える(手立て編)

野中　それでは、今後Sさんの支援を行うために、どんな手立てが考えられるでしょうか。

発言　息子さんの学校のことやお姑さんのお世話など、かなりSさんに家事の負担がかかっていると思うので、月に何回か完全に家事を休める日をつくってはどうでしょう。

野中　なるほど。ローマの休日・妻の休日(笑)。いいかもしれません。

発言　お姑さんが元気な頃は、お姑さんがSさんに指示をして家の中がうまく回っていたということですが、もうお姑さんは指示することも難しい状態なのでしょうか。

Dさん　その程度は大丈夫だと思います。

発言　そうであれば、指示役をお姑さん、行動役をSさんというふうに役割を規定してあげると、混乱も少なくなるのではないでしょうか。

野中　それはいいアイデアですね。Sさんにとってだけでなく、お姑さんにとっても、家の中で重要な役割を担うことができるわけですから、精神的な張りを失わずにいることができますからね。往々にして介護を受ける立場になると、とたんに役割をはずされてしまいがちですが、まだまだお姑さんにできることはあるはずです。「精神障害者にとって、指示は車いすと同じなんです」とお願いするといいんじゃないでしょうか。もちろん、ご主人にも理解していただく必要はあります。

Dさん　はい、わかりました。

発言　ご主人の病気に関する理解が不十分だと思われるので、ドクターから一度きちんと説明をしていただいてはいかがでしょう。

野中　大事ですね。お願いはできますか？

Dさん　はい、大丈夫です。

発言　ご主人はお姑さんを一人では家においておけないと考えているようですが、たまには夫婦水入らずで温泉などに行ってもいいのではないでしょうか。

野中　温泉か、悪くないですね。結婚記念日とかにね。それ以前に、いま40代の夫婦が将来どんな夫婦像を描いているのか、それを聞いておくのもいいでしょう。それがわかれば、援助の大きな方向性も見失わずにすみます。同時に、お姑さんの気持ちも聞いておきたいですね。

Dさん　はい。

発言　Sさんは書道とか料理とか得意なことがありますので、それを披露する機会がつくれれば自信ももてるのではないでしょうか。

野中　そうですね。書道ができたりおいしい料理がつくれたり、Sさんは統合失調症としては抜群に力がある方ですので、それを活かすのは非常に有効でしょう。たとえば、「憩いの場」はSさんにとって、唯一自分自身でいられる場になっているようですから、そこで書道や料理の先生になってもらってもいいかもしれません。「いない」と言っている友達もできるでしょ

う。自分が誰かの役に立っていることが実感できると、人間はすごく大きな力が出ます。先ほどのお姑さんの話と同じで、一方的に援助を受けている状態から脱することが大事です。

Dさん　はい。

発言　通院が不定期になっている点が気になりました。ご本人はバスで行けるようですので、定期的な通院が可能になる体制をつくることはできないのでしょうか。

野中　いろいろな意味で大事なことですね。そのためには、何が必要になってきますか。

発言　ご主人の理解を得る。

発言　お姑さんの介護体制の確認。

野中　そう。それと交通費などの費用面の確認も必要ですね。いかがですか、Dさん。

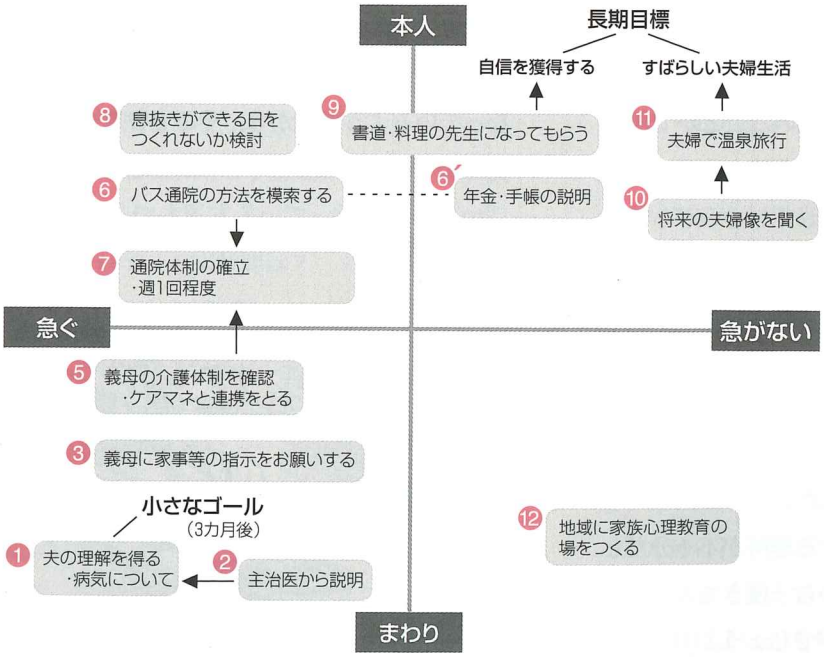
Dさん　ケアマネさんとはコミュニケーションがとれていますので、介護体制の確認はできます。経済的な面は、バスを使うと往復2000円くらいかかりますので、正直少し苦しいかもしれません。手帳を取ると半額になるので、勧めてはみたのですが拒否されてしまって……。

野中　それはいいんですよ。情報を入れておくことが大事なんですから。情報さえ渡しておけば、必要だと感じた時に自分から求めてきますから。もう少し待ってみましょう。ご主人の理解という点はいかがですか。

Dさん　これからの課題だと思います。

野中　このご家族の中心には、やはりご主人がいます。彼を援助チームの味方につけ、一員になってもらえるかどうかが、このケースの成否を分けるポイントだと思いますよ。ですから、お姑さんの支援をしている介護チームと連携をとり、ドクターの協力なども得ながら、しっかりと取り組むことが大事です。

Dさん　はい、わかりました。

野中　だいたい出尽くしたでしょうか。いかがですか、Dさん。

Dさん　自分一人で考えていると、どうしても新しいアイデアが出てこなくて困っていたのですが、今日は皆さんにいろいろな角度から助言をいただいて、だいぶ頭の中が整理されました。明日から一つひとつ実践に移していきたいと思います。どうもありがとうございました。